

第4回例会報告要旨

Y Brasluniau o'r Papurau, y Pedwerydd Cyfarfod,
Tachwedd yr Unfed ar ddeg, 2006
Prifysgol Kinjo Gakuin, Nagoya, Siapan

第1部： 個別報告 Rhan 1: Papur

ウェールズと日本の宮廷文化にみる女性詩人

藤沢邦子

Women Poets in Welsh and Japanese Court Culture

Kuniko Fujisawa

要旨 Abstract

Within social and historic contexts, the Welsh and Japanese courts were the centres of cultural activity, poetry in particular, from 5th to 15th centuries. However, because of the Welsh and Japanese inclinations toward Oral/Aural and Visual (or reading/writing) cultures grew out of their respective language, popular taste and aesthetics, court cultures developed in different ways. Wales was a country of ear-minded 'oral literature': Japan of eye-minded 'written literature'. Under the constraints as private literature in the male-oriented society, the Welsh and Japanese female poets seem to have enjoyed making poems although no poems by Welsh women then survived because they did not write down their works unlike the Japanese counterparts who loved calligraphy. Yet, female poets in both countries not only must have demonstrated their literary gifts through either performing or writing, but also let others, mostly women, appreciate their works in the ages of court culture.

[keywords: women poets, court, oral vs. written literature]

日本では『万葉集』の昔から女性がさかんに詩を詠んだのに、詩がほとんど信仰であるようなウェールズで、宮廷文化の時代には、女性の作った詩がない。ケルトの強い女王、統治者との聖婚にかかわる女神、少年武者を鍛える魔女といった女性の存在感にもかかわらず、詩作はドルイドの昔から男性に独占された職能であり、また狩猟民族の戦士貴族社会では、宮廷詩の主要テーマが武勲と系図と治績を讃える男性的かつ政治的なものだったからと思われる。

とはいえ、口承文芸の国ウェールズでは、「聞き手」として詩歌を楽しんだのは男性に限られない。誰もが民謡的な詩になじみ、『ヘレーズの歌』のような女性を主人公とした叙事詩もあり、13世紀には恋愛詩や哀歌において女性の美

しさや美德が讃えられ始めた。救国ヒーローの予言詩には誰もが心躍らせたことだろう。これだけ詩に接していれば、詩想を得て、また楽しみとして詩作した女性はいたに違いない。ただ社会環境のせいでその数も聞かれる機会も少なく、書き記されないまま失われたのではないだろうか。

農耕民族の文人貴族社会だった日本では、日本語による詩のテーマは風雅で女性の詩作に向き、女性の文化活動にも鷹揚であった。漢字が伝来して以来、日本語は書字中心の言語に変わり、古来の口承文芸はサブカルチャー化し、宮廷では記載文学すなわち「読み書きする文化」が主流となった（口承文学は武士が力を持ちはじめた13世紀に、語りや説話文学として復活し、地方にも広まる）。宮廷は「詩文との調和の中に儒教的王道・善政をしく」とする文章経国思想にどっぷり浸かり、漢詩文が男性社会での公的な文学となった。中国古典に通じた詩作と達筆は宮廷人に不可欠で、いやが上にも「書く文化」あるいは「見る文化」が深まった。宮廷女性は表向きには政治や漢詩文とは無縁であったが、母語で私的文学とされた和歌を詠み、それを自ら書き記すことができた。

ここではウェールズと日本のこうした傾向を「聞く文化」と「見る文化」ととらえ、宮廷時代の女性詩人（アマチュア）について比較考察する。裏づけは『マビノギオン』や『源氏物語』といった文学および社会文化史に探りたい。

宮廷文化の時代とは6世紀から15世紀。ウェールズでは宮廷詩人タリエシンやアネイリンが活躍した時代、そしてローマ軍撤退後のアーサー王や12世紀の英雄的プリンス達を経て、グリンドゥールの反乱後にウェールズ伝統社会が消滅してゆくまでである。日本では大和朝廷において万葉歌人が活躍した頃から、ひらがなの発明で女流文学が花咲いた平安朝を経て、南北朝期に最後で21番目の勅撰和歌集が編纂された少し後までとする。

宮廷では、権力と富を象徴する儀式・酒宴・娯楽が繰り広げられた。ウェールズの詩人は職業的教育を経て宮廷に仕えたり、Bardic Orderの成員として各地を吟遊した。約1000年の宮廷文化時代のあいだ、覇権争いや他民族との攻防にもかかわらず、プリンス達の宮廷では詩歌や語りは健在だった。しかし15世紀になるとウェールズ伝統社会と宮廷詩人は姿を消し、ルネサンスの到来とともに女性詩人が登場する。作品が残っている最初の輝かしい女性は Gwelful Mechain (fl.1462-1500)であった。日本の男性歌人は本来アマチュアであり、勅撰集の撰者・編者あるいは歌論書著者は職業的な「官僚詩人」であったといえよう。やがて天皇の権力は衰えるが、宮廷はずっと文化の中心であり続けた。しかし南北朝期に文化の庇護と統制が宮廷から幕府に（すなわち貴族から武士に）移ると、男尊女卑の風潮のなかで女性詩人は存在感を失っていく。

『マビノギオン』では、男女ともに大広間で談笑し、詩や物語を聞いている。